

# 北海道浮魚ニュース

平成 16(2004)年度 19 号 (通巻 No.183)

2004 年 9 月 27 日

北海道立水産試験場

## 平成 16 年度オホーツク海サンマ漁海況見通し

北海道立釧路水産試験場・網走水産試験場・稚内水産試験場および独立行政法人水産総合研究センター東北区水産研究所・北海道区水産研究所が協議を行い、9月24日に「平成16年度オホーツク海サンマ漁海況見通し」を発表しましたのでお知らせします。

### 【漁況見通し】

来遊資源量：昨年をやや上回る

魚体組成：中型魚が主体

来遊時期：北海道沿岸域への来遊は10月以降

魚体説明：特大魚（体長 32cm 以上）、大型魚（29-31cm 台）、中型魚（24-28cm 台）、小型魚（20-23cm 台）、ジャミ（20cm 未満）

### 1. オホーツク海で漁獲されるサンマの回遊（予備知識）

例年オホーツク海で漁獲対象となる魚群は中型・小型魚が主体で、この群は南部千島太平洋側へ接岸したものの一部が、7月から8月にオホーツク海へ移動・回遊するものと考えられます。したがって、7月から8月に太平洋海域に分布する中型・小型魚の分布量が多く、なおかつ南部千島海域の表面水温がサンマの移動・回遊に適していれば、オホーツク海への来遊資源量は多くなると考えられます。また、オホーツク海に回遊したサンマは、8月から9月頃はオホーツク海の中南部海域に広く分布しますが、9月以降に海水温の低下にともない、比較的水温が高い（10以上）北海道沿岸域へと移動し、そこで漁場が形成されます。

### 2. 来遊資源量

#### ・6月から8月の太平洋における中型・小型魚の分布量

今年7月から8月の太平洋海域（主に東経150度以西）における中型・小型魚の漁獲尾数は0.64億尾と推定され、昨年（0.20億尾）よりやや増加しました。また、東北区水産研究所が今年の漁期前（6月から7月）に実施したトロール調査の結果、東経162度以西の太平洋海域における中型・小型魚の推定分布尾数は154.0億尾で、昨年（53.1億尾）および一昨年（85.4億尾）を上回りました。

#### ・オホーツク海へ回遊する海況条件

7月から8月の南千島海域における表面水温が高い年は、サンマがオホーツク海へ回遊する条件が良好であると考えられます。今年の7月中旬から8月下旬の南千島海域は、サンマの回遊に適すると考えられる水温10以上の水に広く覆われていたため、今年の太平洋からオホーツク海へ回遊する海況条件は良好であったと考えられます。

#### ・オホーツク海における魚群探索・目視調査結果

9月13日から16日にオホーツク海域で稚内水産試験場試験調査船北洋丸によるオホーツク海サンマ漁期前調査を実施しました。調査時、距岸約20マイル付近までの沿岸域は表面水温18以上の宗谷暖流水に覆われていましたが、その沖合には表面水温10~13台のサンマの分布水温帯が広がっていました。しかし、夜間、航行しながらの探照灯による魚群探索調査では、サンマのハネはほとんど見られませんでした。また、停船して目視した調査点16点のうち13点でサンマは皆無で、サンマ魚群が見られたのは、知床半島の北に位置するもっとも沖合の2調査点で数十尾（散見）、1調査点で数尾でした（図1）。

以上のことから、今年太平洋海域からオホーツク海へ来遊するサンマの資源量は、昨年をやや上回るものの、漁期前調査ではサンマの分布水温帯でほとんどサンマを発見できなかったことから沿岸への来遊は少なくなる可能性があります。

### 3. 魚体組成

前述のオホーツク海における漁期前調査時の流し網による漁獲試験（目合29mm, 37mm）では、中型魚を主体に肉体長20~31cmのサンマが漁獲されました（図2）。

このことから、今年のサンマの魚体は中型魚が主体になると考えられます。

### 4. 北海道沿岸域への来遊時期

紋別沖の週間平均表面水温の年最高値とオホーツク海におけるサンマ初漁日の間には、水温が高い年ほど初漁日が遅くなる傾向が見られます（図3）。

今年9月中旬までの週間平均表面水温の最高値は、8月第2週の18.8と高目でした。その後は過去20年間の平均的

推移より若干早めに降温しており、9月第3週現在の週間表面水温は平年値並となっています。

前述の9月中旬に実施した漁期前調査時には、オホーツク海にサンマが分布する水温帯が広がっていましたが、サンマの群を発見できたのは知床半島沖の北緯45度以北の沖合域のみでした（図1）。

以上のように、9月中旬にはサンマの群はまだ沖合域に分布しており、また今年の年最高表面水温が高かったことから、北海道沿岸域への来遊時期は10月以降になると考えられます。

### 5. その他

オホーツク海で操業する棒受網船の多くは太平洋から回航してくるため、来遊資源量が十分ならば、漁獲量はこの回航隻数と操業期間（延べ操業隻数）に左右されます。また、9月中旬・下旬の道東太平洋の漁況が良好である年はそこで操業を続けるため、オホーツク海への回航隻数は少なくなります。そのため、この時期の道東太平洋の漁況がオホーツク海の漁獲量を決定する主要因の一つになっています。今年9月中旬の道東太平洋海域の漁況は良好で、このまま好漁が続けばオホーツク海へ回航する漁船が少なくなる可能性があります。

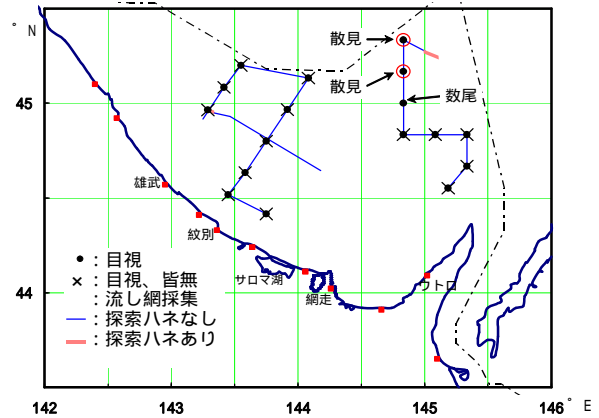


図1 調査船によるサンマ魚群探索・目視調査結果

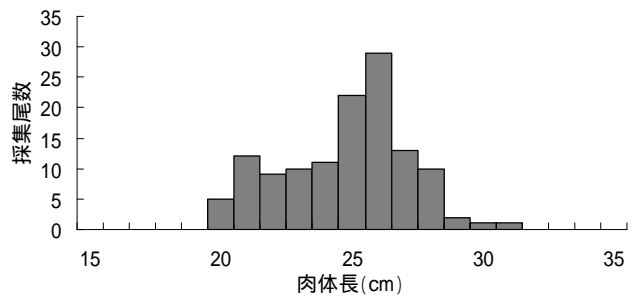


図2 調査船が流し網で採集したサンマの体長組成

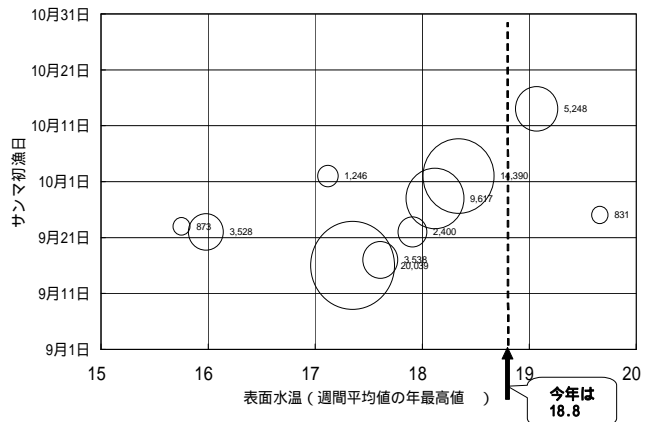


図3 紋別沖の週間平均表面水温の年最高値とオホーツク海におけるサンマ初漁日の関係  
表面水温は北緯44度~45度、東経143度~144度の海域  
図中の数字は漁獲量(トン)を示す  
漁獲量が500トン以上の年のみ図示